

『サイゴン陥落の日』

中山 夏樹

登場人物

高橋真紀

清水哲朗

マキ (若き日の真紀)

テツ (若き日の哲朗)

ラム

雅子

太郎

サチ

夢の中の女

理事長

見城

ラムの亡霊

浮浪者の老人

浮浪者の老女

開演前、一九七〇年代のフォークソングが低く流れている。

当時の東京の映像が流れる。やがて映像はベトナム戦争における米

軍の無差別爆撃に替わる。

テープを早回しする音。近くを救急車が通り過ぎる。

プロローグ

現代。夕暮れの都会の片隅。老女登場。くしゃくしゃの新聞に目を遣り、ブツブツと文句を言っている。

老女

まったく何だつて言うんだろうね。またクラスターが発生したんだつて？

総理大臣が代わったつてちつとも良くなりやしない。今度は〇〇か……トカ

段ボールハウスを抱えた浮浪者の老人が客席からやってくる。

老人

アンチ・ベリー・ベリー造反有理。デカルト、カントで夜が明けて、ニーチ

エ、サルトル日は暮れる。

座っていた老女が突然立ち上がる。

老女

声が小さいい！ お前は何やっても、いつも中途半端なんだ。

こうだろうが。

アンチ・ベリー・ベリー造反有理。デカルト、カントで夜が明けて、ニーチ

エ、サルトル日は暮れる。

南南西の熱き地の、ホー・チ・ミンならベトナムよ。

ホー・チ・ミンならベトナムよ。

なんでこんなセリフ、毎日毎日繰り返さなきゃいけないんだよ。

哲学的だろうが。

哲学的？

革命には哲学が必要なんだよ。

(首を傾け) よく解かんねえ。

革命だ！ 革命だ！ あの時革命さえ起きてりや、あたしや、国家指導部の一

員になつていたんだ。

老人

(客席を見据え) お前らに指導を行う。

指導に従わない奴は、再教育キャンプに放り込んでやる。

老女

それでも言うこと聞かん奴は粛清だ。ババババン。

(客を見直し) 何だって? 狂ってるって?

(急に女性らしく) そうなのよね。哲学がなかったのよね。闘争のバックボーンになる革命哲学ってものが。

だからあの時、シモキタのアパートに踏み込まれるような失態をしでかしたのよ。

老人 またネチネチと何十年も前のことを蒸し返す。

老女 おかげであたしまで務所行きよ。

若いころは能登半島の才女だって言われてたのに……司法試験、間違いないって言われてたのに……(涙を滲ませ) 何でこのあたしがホームレスのババアにならなきゃいけないのよ。

老人 もういいよ。わかったよ。

あんなアパートで爆弾仕込んで俺が悪かった。

でも、俺だって信じてたんだぜ、日本でも革命が起きるって。

北ベトナムがベトナムを統一した直後だったからねえ、「革命を断行するチャンスだ」って組織上層部は言ってたわよねえ。

老人 ベトナムっていやあ、あのアパートに南ベトナムからの留学生が居たなあ。

あいつ、いつの間にかアパートから消えた……

老女 南ベトナム? につくきアメリカの手先だよね。

強制送還されて再教育キャンプにでも放り込まれたんじゃないの。

老人 ベトナム人と一緒にバカ騒ぎしていたノンポリの男と女もいたなあ。

(怒りを滲ませ) ああいう連中が、今の日本じゃプチブル的な家を建てて、いいものを着て、うまいものを食って、善良そうな顔して生きているんだろうな。

老女 そんな奴らばかりが、いい思いをしてるんだよ、今の世の中。

老人 やってられねえよな。畜生、世の中狂ってる。

老女 (退屈そうに) そろそろ売れ残りの弁当が出回る時間だよ。

老人 焼肉弁当の出物があるといいな。

老女 あたしや、今日は幕の内がいいね。紅鮭と卵焼きが入ったやつ。

老人 この頃、幕の内はあんまり残ってないぜ。

老女 お前、男なんだから何とかしなよ。

老人 そんなこと言われたって、ないときやあしうがないだろ。

老女 店の中から調達してくりゃいいんだよ。

老人 それって、泥棒じゃあねえか。泥棒はよくない。

老女 何言ってるんだよ。マスクしないと石投げられるよ。 トカ

老人 お、おう。 トカ

浮浪者の男女、マスクを付けて話しながら退場する。

第一場

二〇一九年四月二十九日。清水哲朗の家、哲朗が一人スマホの画面を見ている。風呂掃除をしていた妹の雅子が居間に入ってきて来る。

雅子 カビだらけじゃない、黒カビだらけ。何カ月風呂場の掃除やってなかったの。
哲朗 えー、毎日シャワーで流してるぞ。
雅子 シャワーで流すだけじゃだめよ。

お風呂場っていうのはね、湿気が凄いんだからすぐカビが生えて来るのよ。時々塩素系の洗剤使っつてしつかりこすっておかないと、すぐ黒カビが生えて来るんだから。

哲朗 黒カビなんて気にならなかったけどな。

雅子 テッチャン、あんた還暦過ぎて、目まで悪くなったの？

哲朗 自分がちよつとくらい若いからって、兄貴を馬鹿にするんじゃない。

お前だつて老眼鏡かけてるくせに。

雅子 老眼鏡かけてて悪かったわね。私はね、心配してるの。

哲朗 何を。

雅子 お風呂場。不衛生にしてたらね、体によくないじゃない。

病気になるって早死したつて知らないからね。

哲朗 そんなことで死にゃしないさ。

雅子 まったくもう、定期的に風呂掃除に来てあげる妹なんて、今時、私くらいのもよ。

そりや、御親切にありがとうよ。だけど、一人でのんびりやってるんだから、そんなに気にしてもらわなくていいさ。

雅子 (しばらくの沈黙のあと) ねえ、誰かい人いないの？

哲朗 えっ？

雅子 誰かい人いないの？ 再婚相手。

哲朗 ばーか。

雅子 何よ。

哲朗 ひとりが気楽でいいって言ってるだろう。再婚なんて面倒くさい。

雅子 テッチャン、あんたしぶといからこの先三十年は生きるわよ。

哲朗 テッチャンはよせ。還暦過ぎてからちゃん付けで呼ばれるのは気持ち悪い。

雅子 いいじゃない。兄妹なんだから……

留美子さんが亡くなって、もう十二年も経つよね。

哲朗 もう、そんなになるのか。

雅子 何言ってるのよ。先月、十三回忌やったばかりじゃない。

哲朗 もう、十二年か。

雅子 テツちゃん、もうボケが出てんの？

哲朗 さつきから言ってるだろ、テツちゃんはよせ。

雅子 はいはい。哲朗おにさま。そろそろ帰るからね。

哲朗 おお、ありがとな。

雅子 (帰りかけて) 謙太は絵里香さんとうまくやってるの？

哲朗 絵里香さん、ちよつと気が強そうだから、謙太、負けちゃってるんじゃないの？ そんなことはないだろう。いい嫁さんだと思うよ。少なくともお前よりは優しいぞ。

雅子 テツちゃん、あんた、老後は謙太たちと一緒に住もうなんて考えてるんじゃないでしょうね。

哲朗 まさか。

雅子 そうは言ってもねえ、十五年も経ったら八十よ。

ねえ、さつきの話だけどさあ。

哲朗 さつきの話？

雅子 私はねえ、留美子さんから頼まれているんだから。

哲朗 留美子から？ 何を？

雅子 前にも話したでしょう。亡くなる前の日に一人でお見舞いに行った時、留美子さんに頼まれたのよ。

「テツちゃん、さびしがりやだから、一人じゃ暮らせないと思うの。誰かいいいいたら、雅子さん、お願いね」って。

哲朗 ……あれは留美子の思い違いだ。

雅子 留美子さん、マリア様みたいな人だったわよね。死を覚悟した時にあんなこと言えるなんて。しかも私に残した最期の言葉。

哲朗 だから、留美子の思い違いだって言ってるだろう。

雅子 ねえねえ、あたしのカルチャーセンターの友達にいい人がいるんだけどなあ。

すごく綺麗な人よ。

哲朗 再婚なんか、する気はないね……

でも、綺麗な人って、どんなタイプの人なんだ。

雅子 そうね、滝川クリステルを少しふくらさせたタイプかな。

哲朗 (興味を抱き) 滝川クリステル？ あんなすらっとした外人タイプか。

雅子 ー、背をもう少し低くして、うん。

哲朗 目をもう少し小さくして、

雅子

哲朗 うん。

雅子 鼻をチョチョっと低くして、

哲朗 あーっ？

雅子 それから、全体をふたまわり位ふっくらさせた感じかな。

歳は五十八歳。

哲朗 それって、普通のおばさんじゃないか。

雅子 テッちゃん、あんた自分が幾つだと思ってるのよ。もう、立派な高齢者じゃない。

哲朗 うるさい。再婚なんかする気はない。無駄口たたいてないで、早く帰れ。

せっかく一人の生活を楽しんでいるのに。

雅子 (帰り支度しながら) 人がせっかく心配してあげてるのに。

さつき、ミートソース、一食ずつ小分けして冷凍庫に入れておいたから、一か月以内に全部食べてよ。チンしてね。

哲朗 あー。あーっ？

雅子 ちゃんと聞いてよ。六パックに別けて冷凍保存してあるからね。一か月以内よ。

哲朗 何を？

雅子 全くもう。ミートソースよ、ミートソース。

哲朗 わかった。

雅子 こーんな兄貴思いの良い妹いないわよ。表彰されたっていいくらいよ。

じゃあ、またね。

哲朗 ありがとよ。

雅子出て行く。哲朗、スマホを操作する。

哲朗 (スマホを覗き込みながら) 真紀……「本当に、ほんとうにお久しぶりです」

舞台端に真紀が現れる。舞台溶暗。哲朗と真紀だけに照明。

真紀 本当に、ほんとうにお久しぶりです。

一週間程前、偶然あなたの同級生だった横田さんと出会い、あなたのアドレスを教えて頂きました。

ぎりぎりまで迷いましたが、思い切ってメールを送らせて頂きます。

明日、約束のサイゴン陥落の日、四月三十日がやってきます。

私は、あの場所に行くつもりです。あなたはどうかされるのでしょうか。

お会いするのは、正直、怖いですが。

でも、お会いできれば、と思っています。

哲朗、部屋の中をゆっくりと歩きまわる。

哲朗

今、この家では、自分一人だけの時間がゆっくりと流れている。そんな場所に、突然、半世紀近く前の下北沢の日々が入り込んできた。真紀、君は明日、あの場所に行くことに決めたのか。

サイゴン陥落の日? ……忘れる訳ないじゃないか。

だけど、四十年以上も前の話。(間)

上京して入居した下北沢のアパートに、三日遅れで入居してきたのが真紀だった。

同じ日、ベトナムからの留学生、ラム・ティ・フーンも引っ越してきた。

二階の一号室が僕の部屋、二号室がマキ、その隣がラムの部屋だった。

四号室には、僕らより少し年上のボサボサ頭の男が住んでいた。

彼はいつも顔を伏せ、決して僕らの顔を正面から見ようとしない男だった。

ラムの祖国、ベトナムは南と北に分断され、資本主義と共産主義との代理戦争の場となっていた。

アメリカ軍の本格的な参入によって事態は益々混迷を極め、どうしようもない泥沼に入り込んでいた。

あの日、出会ったマキとラムとはすぐに親しくなった。

何日かすると、自然に誰かの部屋に集まっていた。

第二場

記憶の中にある一九七〇年代の下北沢。四畳半のアパートの一室。

フォークソングがラジオから低く流れている。

テツ、マキ、ラムが談笑している。

テツ　そうか、三人とも同じ大学の新生だったんだ。俺、物理科。

マキ　私、英文科。

ラム　電子工学です。

マキ　ねえ、どうしてラム君は言葉のわからない日本にきたの?

ラム　もちろんアメリカ、行くことできたし、フランス留学、大丈夫です。

テツ　フランス?

ラム　ベトナム、長い間フレンチ・コロニーだったです。

テツ　フレンチ・コロニー?

マキ　コロニーは植民地。ベトナムがフランスの植民地だったってこと、世界史で習ったでしょう。

テツ 知ってるさ、そんなこと。

マキ そうなの。

ラム だからね、フランスのシヨクミンチだったからフランス語、通じるの国です。私たち小さいころからフランス語、勉強してた。

マキ だったら、フランス留学のほうが良かったんじゃない？

ラム 日本語を習うために半年間も日本語学校に通う必要なかったじゃない。

マキ マキさん正しいです。フランス語、一番慣れてる。

マキ じゃ、なぜ？

テツ 日本の女の子とお友達になりたかった。

マキ テツちゃん！

ラム マキさんと友達になったのはとてもうれしいよ。だけど違います。

マキ どういうこと？

ラム 日本を選んだ。

テツ なぜさ？

ラム ザ・セカンド・ワールド・ウォー、第二次世界大戦でいいのかな？

テツ あの戦争で日本のたくさんの街、焼けて壊されました。

ラム でも、戦争、終わると、とても少しの時間でエコノミー、発展させた。

テツ 新しい国、作り上げました。アジアで一番になりました。負けた国なのにね。

ラム 早い発展をしたテクノロジーだけじゃなく、それをやった日本人の心、勉強し

たいでした。

テツ なるほどね。

ラム 私の国、今、北と南に分けられて戦争してます。

テツ 道も橋も建物も、みんな壊されてます。

ラム でも、いつかきっと平和になる。ならなきゃいけない。その時に何、一番大事

マキ ですか？

ラム ー、みんなの心が一つになること。

マキ そう。だから心が一つになって早く発展をさせた日本で、テクノロジーと心を

ラム 勉強しなかったです。だから日本に来た。

テツ そこまで考えていたんだ。

ラム サイゴンから来たって言ってたから、ラムの国は南ベトナムだよな。

ラム (表情を急変させて) ノー！ 私の国、ベトナム共和国です！

ラム ベトナム、一つの国です。

ラム 南ベトナムとか北ベトナムなんて国どこにもない！！

予想していなかったラムの変化に、テツとマキは言葉を失う。

ラム ごめんなさい、すみません。大きな声あげて……

日本のメディア、「北ベトナム」「南ベトナム」という二つの国、あるような報道しています。

でも、ベトナム、一つの国です。それだけはわかって欲しいです。わかった。済まなかった。

確かに日本人のほとんどの人は二つの国だと思っているわ。

ラム そうなんです。北緯十七度線が国境のように報道されています。

十七度線は停戦ライン。

マキ そうね。

ラム さっき、四号室の人と初めて話、しました。

マキ あの暗い人？

ラム 「ベトナムの留学生です」って言ったら「ギマン的南ベトナム。アメリカのカイライ政権」って言われました。

カイライってどういう意味ですか？ ギマンもよくわからない。

マキ 欺瞞的傀儡政権？……そんな言葉、気にすることないよ。

ラム 教えてください。良くない意味だっことはなんとなくわかります。

テツ ロウ君、どういう意味ですか？

テツ (躊躇しながら) そのまま訳すと、「人を欺く操り人形」。

新左翼の連中が好んで使う言葉さ。

ラム アザムク？

テツ 騙すってこと……

マキ やめて、テツちゃん。

ラム そうか、そんな風に見ているのか、日本の人は……

テツ そうじゃないんだ。俺たちが意味を教えなくてもラムは辞書で調べるだろ。

だから教えただ。

だけど俺たちがそういう風に見ているわけじゃない。勘違いしないでくれ。

マキ そう。きっと四号室の人は極端な思想を持った人なのよ。

私たちは、少なくとも私とテツちゃんは、ラム君がどんな考えで日本に来たのか知っている。私たちが信じて。

哲朗クローズアップ

哲朗

三人は順調に学生生活をスタートさせた。

真紀は英語劇のサークルに入った。

秋には、公演の準主役に抜擢され、セリフ回しの稽古に真剣だった。

真紀は毎晩のようにセリフチェックをしてくれと僕の部屋にやってきていた。

中央にマキとテツ。

マキ 「The house? This is not a house. It is five rooms and a bath and I am getting out as quick as I can and I meant it!」

テツ そんな平坦なセリフじゃないはずだよ。何の感情も伝わってこない。いいか、このセリフは日本語にすれば「家？これが？冗談じゃない。これが家であるんですか」から始まるんだよ。

マキ 「The house? This is not a house.」

テツ 「これが？冗談じゃない」なんてセリフ、どこにもないじゃない。書いてなくとも隠れているんだ。

「これが？冗談じゃない」って気持ちを「not」に込めるんだ。そうしなければ、このセリフは成立しない。やってみよう。

マキ 「The house? This is not a house.」

テツ そっじゃない。もう一度。「not」に怒りをぶつけるんだ。

マキ 「The house? This is not a house.」
テツ よくなってきましたよ。「冗談じゃない」って気持ちが、次のセリフにまでかかってくる。

続けていってみよう。思い切り下品な南部の女になるんだ。こいつはそういう女なんだ。

マキ The house? This is not a house. It is five rooms and a bath and I am getting out as quick as I can and I meant it!

テツ そうだよ。できるじゃないか。

哲朗クローズアップ

哲朗 一年程すると、ラムの日本語は大分上達していた。
ある日、大声をあげながら部屋に飛び込んできた。

中央にマキとテツ。ラムが飛び込んでくる。

ラム テツロウ！ テツロウ！

テツ (喜色満面に) やったよ。やったんだよ。
どうしたんだ。

マキ (同時に) どうしたの。

ラム ベトナムの戦争が終わるんだ。

マキ どういうこと？

ラム パリ和平協定が調印されたんだよ。

テツ ということは……

ラム 停戦の合意ができたんだ。南と北とアメリカの間で。

マキ 本当？

テツ どういう形になるんだ。

ラム 北緯十七度線は国境じゃなくて、統一総選挙までの停戦ラインである、っていうことに合意したんだ。すごいよ。

マキ じゃあ、ベトナムが一つの国として総選挙をするってこと？

ラム (涙をにじませながら) そうなんだ。僕たちが望んでいた通りに話し合いが進んだんだよ。

ベトナムが、一つの統一された共和国になるんだ。

なんて言っているかわからない。

(泣き出しながら) 今まで敵として戦ってきた人たちが、一緒になって新しい国家を築いていくんだ。夢のような話さ。

マキ (ラムの肩に手を置き) おめでとう。良かったね、ラム君、良かったね。

哲朗クローズアップ

哲朗

それからしばらくの間、下北沢楓荘では平和な日々が続いた。

マキは英語劇を続け、そんな中で彼女は何回か恋をし、失恋するたびに僕の部屋に来ては大泣きして帰っていった。

休日には三人でよく映画を見に行った。

あの日の映画は、フランス映画。二人の男と一人の女が共同生活をしながら夢を追いかけてゆく。

三人で映画を見た帰り、ラムと二人で居酒屋に立ち寄った。

珍しく、ラムがムキになって意見してきた。

中央にテツとラム

ラム 駄目だよ。あんなの。

テツ なんだよ。

ラム 映画の中の三人の関係。無理しすぎだよ。

テツ 結構いい映画だったじゃないか。

ラム 映画の良し悪しを言ってるんじゃない。

テツ　じゃ、なんなんだよ。

ラム　三人の関係さ。二人の男の間で、ジョアンナ、動きが取れなくなってたじゃないか。わからないのか。

テツ　なに興奮してるんだよ。

ラム　マキのことだよ。

テツ　マキがどうしたっていうんだ？

ラム　テツロウがいるから、マキの恋はいつも前に進めなくなる。

テツ　関係ないだろ。

ラム　しつかり見てやれよ。マキのこと。マキの気持ち、わかっているんだろ。

テツ　わかったようなこと言うなよ。

ラム　知ってるんだ。研究室で徹夜だとか言っつて、新入生の女の子の部屋に泊っていることを。

テツ　お前に関係ないだろ。

ラム　マキだっつておそらく気付いている。

テツ　そんな嘘つく必要ないじゃないか。まるで、浮気男みたいだ。

ラム　ふざけるな。俺がどこに行こうと勝手じゃないか。

テツ　マキが身動き取れなくなっているのがわからないのか。

ラム　マキのことを本気で受け入れるのか、はっきりと拒絶するのか、どっちかじゃないとだめだよ。

テツ　余計なお世話だ。

ラム　彼女が中途半端な状態で立ち往生しちゃってるじゃないか。

テツ　身動きが取れなくてイライラしているのはお前だろ。

ラム　えっ？

テツ　そんなにマキのことが気になるんなら、ラムが何とかすればいいじゃないか。

ラム　お前のこと、まんざらじゃないんじゃないか、マキは。

テツ　そういうことを言ってるんじゃない。

ラム　僕はマキの気持ちかわかるから言ってるんだ。

テツ　何怒ってるんだよ。

ラム　いい加減に逃げるのはやめたらどうなんだ。先に帰る。

ラム、金をテーブルにたたきつけ出てゆく。

テツ　待てよ！

（ラムが出て行ったのを見届けて）逃げてる？　何から逃げてるっていうんだ。

哲朗クローズアップ

哲朗

縛られるのが嫌だったんだろうなあ、あの頃。
アパートに帰ってくるいつもマキが居た。
一晩中、二人で一緒にいても、何も起きなかった。いや、何も起きなかったのではなくて、自分自身にブレーキをかけ続けていたのだろう。
中途半端な状態を続けていることが居心地よかった。
あの頃の自分にとって、マキは帰る場所だったのかもしれない。
帰る場所か……

哲朗、スマホを操作し、メールを送る。

メール着信の音とともに、舞台反対側に真紀が現れる。

真紀

（メールを読む）「明日、僕も約束の場所に行きます。貴女はまさか二十二歳のままではないですよ。昔、真紀と過ごしたシモキタでの日々を思い出していたら、渋谷の全線座で『冒険者たち』を見た後、突然怒りだしたラムの顔が鮮明に浮かんできました。もしかしたら、彼も来るかもしれない。
では、明日。 清水哲朗」

真紀、スマホから目を離し、回想する。

真紀

『冒険者たち』？ あの日、私は先にアパートに帰っていた。
しばらくして、飲みに行ったはずのラム君が一人で帰ってきた。
「どうしたの？ 飲みに行ったんじゃないの」って聞くと、「何でもない」と拒絶された。
あんなに怒った顔のラム君を見たのは後にも先にもあの時だけだ。
（間）そんな小さな波風はあったけれど、あの頃は本当に平穏な時代だった。でも、そんな穏やかな日々は一変した。
四年生への進級を控えた春休みのあの日、あの日を境に。

マキの部屋、ノックの音。

マキ

どうぞ。（入り口に目を遣り）どうしたの？

ラム

（憔悴しきった顔で入ってくる）サイゴンと連絡が取れない。

マキ

いったいどうしたの？

ラム

十七度線が破られた。

マキ どういうこと？

ラム 停戦ラインを無視して北の全面攻撃が始まった。

マキ パリ和平協定が破られたってこと？

ラム ダナンが制圧された。

マキ 政府軍は？

ラム 政府軍は負けた。散り散りになって逃げまわっているらしい。

兄さんの家族がダナンにいるんだ。

マキ お兄さん、確か官庁勤めよね。

ラム そう。ダナンの事務所に勤めている。

マキ 確か、大きな基地の町よね、ダナンって。

ラム アメリカ軍が居た頃は一番大きな基地があった。

テツが飛び込んでくる。

テツ マキ、ラムはいるか？ ああ、やっぱりここか。

マキ テツちゃん。

テツ 電気屋のテレビで見たよ。

大変なことになっているな、ベトナム。家族とは連絡取れたのか？

だめだ。全く電話が通じない。ダナンの兄さんは殺されているかもしれない。

マキ ラム君、悪いほうには考えないで。

ラム 僕だって、そんなこと考えたくないさ。

テツ 大丈夫だよ。

でも、ベトナム協会の知り合いが言っていた。ダナンでは、軍人だけじゃなくて、政府の役人も随分処刑されているかもしれないと。

テツ いきなり処刑？

ラム わからない。もしかしたら、捉えられているだけかもしれない。とにかく具体的な情報がないんだ。

マキ 大使館ではなんて言ってるの？

ラム 北の正規軍と解放戦線が合流して首都サイゴンに向かっていているらしい。

南の政府軍は防衛線を突破され続けて、散り散りになって逃げまわっているよ
うだ。

大使館にも、それ以上の情報は入ってきていない。

テツ アメリカはどうなんだ。

ラム 全く動かない。きつと僕たちは見捨てられたんだ。

僕の国、ベトナム共和国はなくなってしまう。

真紀 クローズアップ。ヘリコプターの音。
サイゴン陥落前夜の映像が映される。

真紀

サイゴンを取り巻く状況は日ごとに悪化していった。ベトナム共和国政府はアメリカに軍事支援を要請した。しかし、反戦の国内世論を背景に、アメリカ議会はこれを拒否した。アメリカの動向を見極めた北の勢力は、一気に首都サイゴンを包囲した。外国人と、高級官僚、それに中枢部の軍関係者の国外への脱出が始まり、首都機能は完全に麻痺していた。
ラム君は毎日、ベトナム大使館やベトナム協会に出かけて行った。私たちに顔を見せることは、めったになくなっていった。そんなある夜、疲れ切った顔で私の部屋に現れた。

マキの部屋にラムが顔を見せる。当時の歌がラジオから流れていく。

ラム

テツロウは留守みたいだね。

マキ

テツちゃん今日も研究室にお泊りだった。

ラム

そうか……今日は帰ってこないのか。

マキ

テツちゃんに何か伝えておく？

ラム

……いや、いいんだ。

マキ

(ラムの顔をじっと見て) 随分痩せちゃったじゃない。夕ご飯食べたの？

ラム

いや、まだ。

マキ

ちよつと待って、今、余りご飯でお茶漬け作るから。入って。

ラム

ありがとう。

マキ

(お茶漬けを手に) 何もないけど、どうぞ。

ラムは出されたお茶漬けをむさぼるように食べる。

マキ

いつから食べてなかったの？

ラム

今日はコミュニティでビスケットを食べた。

マキ

(何かに気づき) もしかして、お金……？

ラム

今のサイゴンは送金なんかできる状態じゃない。銀行も動いていない。

マキ

ごめんなさい。全然知らなくて。テツちゃんにお金借りようと思ってたんじやない？

ラム

うーん……そういうわけじゃないけど。

マキ ラム君、中華屋さんでのアルバイトは？

ラム 先月で辞めた。

マキ どうして？ 仕送り止まっているのに。

ラム ベトナム人のみんなから遅れたくないんだ。

マキ どういうこと？

ラム ベトナム人のコミュニティに詰めていないと情報が入ってこない。

サイゴンは無政府状態になっている。状況は毎日悪くなっているんだ。

中華屋でアルバイトしていると、情報に乗り遅れてしまう。

マキ 今年の授業料は？ 確か三月末が納付期限だったんじゃない？

ラム 学校もベトナムの状況を分かってくれているから、納付期限を延長してくれ

た。だけど……だけど、無理なんだ。辞めるしかない。

マキ あと一年じゃない。あんなに頑張っていたのに。

授業料なら何とかなるわよ。あたしもテツちゃんも協力するから。学生課に行つて、分割にしたらう交渉しようよ。

ラム (感情的に) それどころじゃないんだ！

マキ えっ？

ラム ごめん。大きな声を出して。

サイゴンは本当にひどい状態になっているんだ。

まだ北の軍隊は市内には入ってきていないんだけど、街の秩序はめちゃくちゃになっていっているらしい。

特に、政府の役人や軍の関係者の家は襲われて、略奪の標的になっているようなんだ。放火された家もずいぶんあるみたいだ。

マキ ラム君のお父さん、確か……

ラム そう、政府の役人。もしかしたら、もう殺されてしまったかもしれない。(感情が高ぶってくる)

生きていたとしても、ひどい目にあっている……きつと。

マキ お母さんもお父さんと一緒でしょ？

ラム わからない。

最近サイゴンを抜け出してきた人の話だと、家族とはぐれた大勢の子供たちが物乞いをしているそうだ。

いったんバラバラになった家族は、会いたくても会えない状態になっていると言っていた。

僕の家も、もう焼かれてしまっているかもしれない。ママが心配だ……

マキ (嗚咽を必死でこらえるラムを抱きしめる) 大丈夫。大丈夫よ。

ラム ……ママ。

マキ 大丈夫。ラム君のママは大丈夫よ。大丈夫、大丈夫よ。

ラム泣き崩れる。マキ、静かに、つぶやくようにスカボロー・フェアを歌い始める。やがて歌声は響き渡る。

ラム (顔を上げて) ありがとうマキ、ずいぶん気持ちが落ち着いた。ありがとう。
ラム君のこと、大事だから。

ラム 大事? 僕もマキのこと……大事だよ。

マキ 働きながら、大学続けようよ。できるよ。

ラム 無理だ。国がなくなる。

マキ 国がなくなる? でも、パスポートがあるでしょ。

ラム 紙切れになっちゃうんだ、きつと。

マキ でも、大使館に行けば。

ラム 国がなくなったら、大使館も閉じられる。今のまま日本に居たら、僕たちは国籍のないインドシナ難民になるんだ。

マキ 日本の政府は? 政府も放ってはおかないんじゃない。

ラム 日本の外務省は難民として認めないと思う。

マキ そうしたら、僕らはフホウタイザイシヤになる。

ラム 大学にも、職場にもいられなくなるんだ。

マキ でも、落ち着いたら大使館は再開されるんじゃないの?

ラム 別の国なんだよ。

マキ きつと、北が統一ベトナムの政府を作る。

ラム 新しいパスポートを申請すれば、多分僕たちは罪人として強制送還される。

マキ 国に帰ったら、投獄されると思う。

ラム なぜ、なんでそんなことに?

ラム 国の一大危機に、税金を使って海外で遊んでいた、許し難きブルジョア。そういうレッテルを貼られると思う。

マキ そんな。

ラム 彼らにしてみれば、僕たちみたいな留学生なんて、絶対許すことはできないと思うよ。

マキ 日本で、永住権、取れないの?

ラム 無理だ。

ラム 日本の永住権を得るためには、日本人と結婚することが必要なんだ。

マキ だったら、何とかなるんじゃない。何なら……

ラム ありがとう。でも名目じゃダメなんだ。

ラム 日本の場合、離婚したら永住権は剥奪される。

ラム つまり、僕と結婚したら、一生、僕と夫婦でいてもらわなきゃならない。

そんなことを誰かに頼める訳ないじゃないか。

マキ そんな……何か方法はないの？

ラム 希望がないわけじゃないんだ。

僕だって、投獄されるために強制送還を待つようなことはしない。
カナダに望みをかけているんだ。

マキ カナダ？

ラム そう、日本に住み続けることは危険すぎる。

永住権を取るのに、一番可能性の高いのがカナダなんだ。
だから、パスポートが紙切れにされる前にカナダに渡らなければならないんだ。

マキ カナダに行くって言っても、ラム君の知り合いが居る訳じゃないんでしょう。

ラム いったいどうやって。

ラム カナダ在住の同胞たちが受け入れ態勢を作りつつある。

彼らが永住権を得るための結婚相手を探してくれる。

マキ 会ったこともない人と結婚するっていうの？

ラム それしか方法がないのさ。結婚していても名目的なものらしい。

日本に來ている留学生のほとんどはカナダ行きを選んだ。

マキ 大丈夫なの？

ラム (自信なく) 大丈夫さ。

マキ 本当に大丈夫なの？

ラム 行ってみなければわからない。でも、僕らには時間がないんだ。

だから、パスポートが有効なうちにカナダに渡っておきたい。

一番可能性の高いのがカナダなんだ。

それに賭けるしかない。それしかないんだ。

真紀、クローズアップ

真紀 あの時、財布に入っていた一万五千円をラム君に握らせるのが、あの夜の私にできる精一杯だった。

ラム君は、うるんだ眼をしながら、「ありがとう、本当にありがとう。必ず返すから」と繰り返し返した。

翌日テツちゃんが返ってくるのを待って、自分たちに何ができるか相談した。

哲朗、クローズアップ

哲朗

マキからラムの窮状を聞いて本当にびっくりした。

同じアパートに暮らしているながら、ラムがそこまで追い込まれていることに全く気付かなかった。
僕は翌日から学校でカンパを募った。バイト先に事情を話してバイト代の前借もさせてもらった。
それから一週間くらい経った日、ラムがマキを誘って僕の部屋にやってきた。あの夜が三人そろって楓荘で会う最後の夜となった。

中央にテツ、マキとラム

マキ 特別な話って何？

ラム 明日のバンクーバー便が取れた。急にキャンセルが出てね、それでチケットが回ってきたんだ。

マキ 明日？ 随分急な話ね。

テツ そんなに急がなきゃいけないのか？

ラム 明日にもサイゴン市内に北の軍隊が入ることになると思う。多分、その日に僕の国は消滅する。

テツ そんな状態なのか。

ラム 新しい政府がパスポートの発給を始めたら、僕が持っているパスポートは無効にされる。

だから、ベトナム共和国のパスポートの効力があるうちにカナダに入っておきたいんだ。

明日の便が、僕にとっての最初で最後のチャンスだと思う。

マキ わかった。でも寂しくなるなあ。ラム君がいなくなっちゃうなんて。

ラム (あらたまって) 二人には、本当に感謝しています。

このアパートで三年間暮らせて、本当に良かった。

二人と友だちになれて、一緒にいろいろなことができて、本当に楽しかった。ありがとう。

テツ (意識して茶化すように) ラムは運がいいねえ。明日のチケットが手に入るなんて。

そう、こういうのを「犬も歩けば棒に当たる」って言うんだよ。
向こうでの結婚相手、綺麗な人だいいな。

マキ テツ、ふざけないで。ことわざの意味も違っているし。

ラム テツロウの言うとおりだよ。本当に運がいいと思う。

結婚相手はどうかな。向こうの支援団体が決めることだし、もしかしたら、九十歳のお婆ちゃんかもしれない。

テツ 九十歳？ 九十歳の花嫁だったら、ウエディングドレスは絶対ミニスカートが

マキ いい。膝上三十センチの超ミニ。
マキ いやーねえ。でも、かわいいかもね、ミニのお婆ちゃん。
テツ マキ、やってみようよ、バージンロードのシーン。

高らかにウエディングマーチが鳴り響く。
テツ、マキの手を取り、ウエディングマーチを歌いながら、バージンロードを歩く真似をする。マキ、杖を片手によろけながら進む。
三人、「おっと」と「オー・マイ・ダーリン」などと言いながら盛り上がる。

マキ (一瞬の静寂の後) でも、これきりラム君に会えないなんて寂しいな。

次に会う約束を決めておこうよ。

テツ いいねえ。まず日にちは、ラムが日本を発つ明日。四月三十日、昼。

マキ、ラム 賛成。

マキ 問題は何年後の四月三十日かよねえ。十年後でどう？

ラム 十年後じゃまだ安定していないと思う。

どこかに定住しているとは思うけど、多分、日本に来るお金、ないんじゃないかな。

マキ じゃ、二十年後は？

ラム 二十年後は四十一歳、三十年後は五十一歳。うーん、仕事が順調なら一番忙しい時だな。自由に休みをとれる立場にないかもしれないし……

マキ いったい幾つになったら大丈夫になるの？

ラム うーん、仕事を離れて、余裕ができるのは……六十五歳位かな。

マキ 六十五？

ラム その頃ならきっと日本に来られると思う。約束できるよ。

マキ いやだー、あたし、お婆ちゃんになっちゃってる。

テツ 杖を片手に、ヨイヨイヨイ。意地悪ばあさんになってるかもな。

マキ やめてよう。

ラム マキさんなら、きっとまだまだ若いですよ。美しい大人の女性になってます。

僕は大人の女性になったマキさんに会ってみたいです。

よし、決まりだ。いいな、マキ。

わかった。

俺たちが六十五歳になるのは、六十五引く二十一で……

マキ 二〇一九年。

ラム 二〇一九年か。

マキ で、どこにする？ 待ち合わせ場所。

テツ 四十四年後か、街の様子もだいぶ変わっているだろうな。
ラム 今ある建物もほとんど建て替えられているだろうね。
テツ 京王プラザホテルのロビーなんてどうだ。
マキ 残っているかどうかわからないわよ。

テツ 高層ビルの耐久年数は四、五十年、っていう話もあるし。
残っている建物か。

ラム 大学の記念館前ってどうだろう。

マキ いいわね、きつと残っている、石造りのランドマークなもの。

百年後だって、きつと残っているわ。

よし、決定。

マキ 復唱してみようよ。

三人 二〇一九年、四月三十日、昼、大学記念館前広場に集合。

羽田空港出発階。飛行機が離陸する音、アナウンスの声。舞台上に
出発ゲートでラムを送るマキとテツのシルエット。ラムは右手を高
く上げ、ガッツポーズをしながら消えてゆく。

真紀と哲朗、二人に光が当たる。

真紀

ラム君は不安な様子を全く見せず、終始にこやかだった。

まもなく効力を失うパスポートを手に、見知らぬ国に向けて出国ゲートに向か
うラム君の後姿を見ながら、涙があふれてきた。

最後に彼は大きくガッツポーズを見せ、一瞬立ち止まった。

だけど、一度も後ろを振り返ることなく出発ゲートに消えていった。

背を向けて立つマキとテツの視線の先に、サイゴン陥落の映像が映
し出される。

哲朗

帰ろうとしたとき、ロビーのテレビに目を遣ると、サイゴンの大統領官邸に突
入する戦車部隊が映し出されていた。

戦車の周りには、歓喜の表情で赤旗を振りながら行進する、おびただしい数の
群衆がいた。

僕たちは無言のまま、しばらくそこを動くことができなかった。

そのあと、どうやって羽田からアパートまで帰ってきたのか、まったく憶えて
いない。

真紀

一九七五年四月三十日は、ラム君が予測していた通り、サイゴン陥落、ベトナ
ム共和国消滅の日となった。

哲朗

同時に、南ベトナム共和国臨時革命政府の樹立が宣言された。翌日にはサイゴン市はホーチミン市と改名され、各地で人民裁判が開始された。

一年後の四月、統一総選挙が実施され、統一国家、ベトナム社会主義共和国が誕生した。

真紀

ラム君、あなたは今もカナダで暮らしているのですか。それとも無事に祖国に戻ることができたのでしょうか。

想像もできないような、大変な人生を送ってきたのでしょうかね。

そんな中、三人で交わした約束、憶えているでしょうか。

哲朗

ラム、お前は生きているのか。生きているなら、約束を憶えているのか。そして日本に来られる状況にあるのだろうか。

もし、状況が許すとしても、来ようとするだろうか。

真紀

ラム君、あなたが来られなければ、それは仕方ないこと。そう、仕方ないこと。

中央にマキとテツが現れる

テツ

ハガキの一通くらい出せないのかなあ。

マキ

え？

テツ

ラムだよ。

マキ

大変なんでしょうね。まだ落ち着き先が決まっていらないのかしら。

テツ

(指折り数え)五、六、七、八、九、十、十一、七か月になるぜ。

マキ

きつと、生きることに必死なのよ。カナダでの生活。

(間) ねえ、私、アメリカに語学留学しようと思うの。

テツ

留学？

マキ

ええ。

テツ

なんで？

マキ

卒業に必要な単位、全部取っちゃったから。

テツ

急にそんなこと言われたって……

マキ

どうしたの？

テツ

いや。

マキ

私が居なくなると寂しい？

テツ

そ、そんなことないさ。

マキ

そうよね。私が居なくなれば、かわいい後輩の女の子、部屋に連れて来られるしね。私に気を使ってたんでしょ。

テツ

何言ってるんだよ。

マキ ふた月くらい前かな、テツちゃんが研究室にお泊りだって言っていた夜、同じ研究室の横田さんが来たの。

テツ 横田が？

マキ 横田さん、こう言ってたの。

「おかしいな、今日、明日は放射線検査日だから、研究室は入室禁止のはずだけどなー」って。

テツ 横田のやつ。

マキ それで、カマかけてみたの。

「それじゃ、いつもの彼女のアパートに泊まりに行ってるんじゃないかな」って。

そうしたら、「なーんだ、聞いてたのか」って、ゼーンぶ話してくれたわ。

テツ 全部って何を。

マキ 仏文科の下級生らしいわね。ポニーテールのかわいい子だって。

それに、テツちゃんは妹さんと一緒に暮らしているらしいわね。

かわいいポニーちゃんが絶対に妹さんと鉢合わせしないようにしてたわけね。

妹さんって、どなたかしら？ (間) もしかして私のこと？

テツ それはな、なんて言うか、言葉の綾で……

マキ 翌日、テツちゃん帰ってきたから、試しに、「昨日の実験うまくいった？」って

聞いたら、「昨日は最高に捗った」って言ってたよね。

何が捗ったんだろうって、笑っちゃった、私。(と、悲しく笑う)

テツ ちょっと待て、あの日はな。

マキ 研究室のオトマリが多すぎたよ。あんな嘘つかなくてよかったのに……

私はね、テツちゃんを卒業することに決めたの。

それでね……明日このアパートを引き払うの。

テツ 明日？ 明日って、そんな、なんでそんなに急なんだよ。

どうして前もって言ってくれなかったんだ。

わかってよ。

……

話したら、決心がぐらついてしまうじゃない。

テツ ……わかった。アメリカの……どこに行くんだ？

マキ ボストン。

テツ どうせなら、ラムの居るカナダにすればよかったじゃないか。

マキ だめだよ、そもそも、ラム君がどこに居るかまったくわからないじゃない。

バンクーバー便に乗ってカナダに行ったけど、バンクーバーに居るとは限らないし。

とにかく、早口のアメリカ英語に慣れるには、ボストンがいちばんいいみたい

だから。

(しばらくの沈黙の後) テツちゃん、寂しい？

テツ バカ言うな。ちょうど卒研発表の追い込みの時期だし、うるさいお隣さんがいなくなったら……本当に居なくなっちゃうのか。

マキ うん。

さつき、お風呂屋さんの帰りにさざんかの花が咲き始めていたよね。

テツ あの角の家か？

マキ そう。さざんかの花言葉、知ってる？

テツ 知るわけないだろ。

マキ 知るわけないか……そうよね、知るわけないよね。

テツ 花言葉になんか興味ないね。

どうせ、愛とか恋とかいうんだろ。だいたい、お前らしくないよ。

マキ 私らしいって？ (感情的になって) 私らしいって何？ どういうこと？

愛とか恋じゃいけないの？ テツちゃんに愛とか恋の話しちやいけないっていうの！

テツ どうしたって言うんだ。(肩に手をかけ真紀を振り向かせる)

マキ 私たち、いつも一緒にいたのに……私たち、いったい何だったの？ (テツの

目を正面から見て、急に震え始める)

マキ……

マキ 今夜が、最後なんだよ。会えなくなっちゃうんだよ。ほんとうに最後になっちゃうんだよ。最後になっちゃうんだよ。

テツ マキ！

マキ、テツにしがみつく。テツ、マキを強く抱きしめる。暗転

第三場

二〇一九年四月三〇日の朝、小鳥のさえずり。

太郎の美容室。オネエの美容師・太郎と助手のサチが開店の準備をしている。BGM流れている。

サチ ねえ、チーフ、開店時間の前に予約入れてきたお客さんって誰なんですか？ まったく迷惑な話ですよ。

太郎 高橋真紀さん。しょうがないじゃない、この店開店以来の大事なお客さんなんだ

から。

サチ へー、真紀さんじゃ断れないですよね。

太郎 真紀さん、お昼から何十年振りかで大切な人と待ち合わせだつて言うんですもの。

サチ 昔の恋人かしら。

往年の美女にまつわる大恋愛物語なんちゃつて。どんな人でしょうね。

太郎 余計な詮索するんじゃないの。

サチ スンマヘン。(と、太郎に向かってアツカンベーをする)

太郎 そう言えば、真紀さん、娘さんはいらっしゃいけど、高橋つて苗字は一度も変わったことないらしいわよね。

サチ さすがチーフ、よく調べてますねえ。

太郎 佐々木さんから聞いたのよ。

サチ 佐々木さんつて？

太郎 真紀さんが紹介してくれた二丁目の佐々木さん、あの人、真紀さんの高校時代のお友達なんだつて。

サチ つて言うことは、シングルマザー？ 何十年も前に？

ドアベルの音と共に真紀が入つて来る。

太郎 いらつしやいませ。お待ちしました。

まあ、真紀さん、今朝は一段とお綺麗。

真紀 ありがとう。嘘でもそう言ってもらえると嬉しいわ。

太郎 嘘じゃないわよ。

あたし、本当のことしか言えないからオネエになったのよ。

「河原崎太郎は男の中の男でござる〜」なんて、とてもじゃないけど言えなかつたんですもの。

「河原崎太郎は男の中のオネエでござる〜」つて、大声で宣言しちゃったんですものね。

太郎 サッチャンお黙り！（とサチを睨み付ける）

真紀 まあまあ二人とも……でも太郎ちゃん、河原崎太郎なんて、いい名前ね。

太郎 私の名前なんて大したことないわ、サッチャンなんてすごい名前よ。

狐小路さち子つて言うんだから。

サチ コーン。

真紀 まあ。

サチ 狐小路じゃなくて錦小路。チーフいい加減にしてよ。

太郎 そうだつて。また間違えちゃつた。だつてお稲荷さんみたいなんだもん。

サチ まったく。

真紀 太郎ちゃん一つ聞いてもいい？

太郎 いいわよ。但しあたしの知っていることしか答えられないわよ。

真紀 入口の美容室の看板の下に「IGH 日本支社」って小さな看板が出てるけど、あれって何？

太郎 インターナショナル・ジェネラル・ハンデイーマンっていうの。国をまたがった便利屋さん、ってところかしらね。

サチ サッチャンがやってる闇の商売よ。

サチ 闇の商売なんてひどーい。人助けのオ・シ・ゴ・ト。

真紀 こう見えてもわたくし、日本支社長なんですから。

サチ 人助けのお仕事？ さつき太郎ちゃんが、国をまたがった便利屋さんって言ったけど、例えばどんな仕事があるの？

サチ そうね、最近依頼があったのは、ニューヨークの人からで、長野の善光寺参道のお団子屋さんの住所を調べて欲しいっていう仕事。

真紀 お団子屋さんの住所？

サチ そう。その人、長野に旅行に行つてその店でお団子食べた時にパスポートと財布を置き忘れたらしいの。

マキ まあ。

サチ 気付かないで駅に向かって歩いていっていると、団子屋のおばあちゃんが、はあはあ言いながら百メートルも追いかけて来て、パスポートと財布を渡してくれたんだって。

真紀 それで？

サチ その時はサンキュウ・ベリーマッチだけ言って別れてしまったけど、帰国してからどうしてもお礼がしたいって思ったららしいのよ。

真紀 それで、その団子屋さんのお婆ちゃんを探し出して、住所と名前を調べて欲しいって言って来たのよ。

真紀 大変な仕事ね、探偵みたい。

サチ 結構大変だったんですよ。でも、ちゃんと調べて成功報酬を頂きましたから。

太郎 あの時は幾ら貰ったんだっけ？

サチ 交通費別で五〇〇ドル。

太郎 サッチャン、ちゃっかりしてんのよ。

サチ 別に交通費二〇〇ドル貰っておきながら、実際には全部電話で調べてるんだから。電話だろうが何だろうが、ちゃんと聞き取り調査して完璧な報告をしたんだからいいんですよ。

太郎 そういうのを悪徳商売っていうのよ。その内、捕まるわよ。

真紀 でも、依頼主からしたらありがたいことよね。

サッチャンが言うように人助けよね。

サチ　　そうでしょ。ねえねえ、今日も変な仕事が入っているのよ。

真紀　　どんな仕事？

サチ　　先週、アメリカのシカゴから回ってきた仕事なんだけど、今日の午後一時にある所で待っている日本人に小さな包みを渡して欲しい、っていうことなのよ。

太郎　　麻薬ね。きつと待ち合わせ場所に警察が張り込んでいるわよ。

真紀　　まさか。

太郎　　待っているのは、警察じゃなくてやくざかもしれない。あんた、殺されるかもよ。チーフ、変なこと言わないでよ。

サチ　　税関で一度開封されてるから、変なものは入っていないと思うんですけどね。

真紀　　犯罪にはならないと思うけど、少し変な話よね。

普通なら渡したい人に直接送るでしょ。

サチ　　ちよつと気持ち悪いけど、前金でフィーを貰っちゃっているし、優しいチーフが外出を認めてくれるから行ってくるんですけどね。

太郎　　その分は給料から引いとくつもりだったけど、今日は時間外の早出があったから、プラスマイナス・ゼロでいいわ。

サチ　　ケチ！

真紀　　あつ、そうだ。今朝はごめんなさいね。開店前から予約入れて頂いて。

太郎　　いーえ、他ならぬ真紀さんの大事な日ですもの。

サチ　　昔の恋人に会うんですよ。

太郎　　サッチャン。

真紀　　いいの、いいの。昔のお友達に会うの。

太郎　　いいわね、昔のお友達って。学生時代のお知り合い？

真紀　　そう……何十年振りだろう。

太郎　　じゃ、思いきり若く仕上げなくっちゃね。

三十代、いーえ、二十代に見えるくらい若作りにしてあげる。

真紀　　二十代？　二十代の頃か……

ねえ、太郎ちゃん、一九七五年頃って、貴方何してた？

七五年……高校を中退した年ね。

あたしって、普通じゃなかったから、みんなから気持ち悪いつて云われてね、それで学校に行けなくなっちゃったのよ。

真紀　　そうなんだ。

太郎　　親父が怒り狂ってね……

突然の衝撃音。太郎、16歳の頃を思い出す。

太郎 (自分の父親になりきって) バカ野郎。お前がそんな風だから、みんなからのけ

者にされるんだ。鍛えなおせ。性根の曲がったお前の根性を鍛えなおすんだ。

サチ (少年太郎になりきって) そんなこと言われたって……僕、どうすればいいの。

太郎 自衛隊に入れ、自衛隊に入って別人になるんだ。国の為に頑張るんだ。

サチ いやだよ。僕、自衛隊になんか入ったら、きつといじめられる。いやだ。

太郎 黙れ! もう入隊申請を出してきた。来月から行くんだ。

サチ いやだ、いやだよ。

太郎 (本人に戻って) そんなわけで、入隊させられたのよ。陸上自衛隊歩兵第二十七

師団

真紀 自衛隊にいたんだ。

太郎 だけど、私って、こんなんでしょ。入ってみて、すぐにわかったの。ここは私な

んかが居られる所じゃないって。

真紀 それで辞めたのね。

太郎 そうよ。自慢じゃないけど、一週間しかもたなかったわ。

辞めてみてはつきりわかったの。私って、普通の男の子として生きていけないって。だから、自分らしく生きよう、って。

真紀 それで美容師になったの?

太郎 ううん。家に戻るわけにいかなかったから、すぐに寮に入れる六本木のゲイ・バ

ーにしばらくいたわ。

あの、有名な「ミツキーマウス」。行ったことあるでしょ?

真紀 ないわよ。

太郎 そーお? 人気のある店だったのにい……一年いたけどね、そこもなんかしつ

くりこなくて、それで美容学校に行ったの。

真紀 そうなんだ。その後、お父様とは?

絶縁。一度も家に帰ってないわ。……私のことなんかどうでもいいの。

特別な日だって言ってたから、今日、会う人って、昔の恋人でしょ。

真紀 そうかもね。

太郎 マー、いいわね。最後にその人に会ったのは何年前?

真紀 学生の頃だから、何年になるのかしら。そんなこと言ったら、歳バレちゃうじや

ない。ねえ、思いつき若くして。二十二歳位に。

太郎 がつてん承知の助。

サチ (小声で観客に) に、に、二十二歳ですって、二十二歳。

ちよつとくらい美形だからって、ずうずうしいと思いませんか?

ねえ。いくらなんでも二十二歳は無理よねえ、

どんなに頑張っても五十九歳八か月がいい所よ。ふん。

太郎 (笑顔を作り) 真紀さん、二十二歳の時、振られた人なんですか、今日会う人って。サッチャーさん、あんた、何て事を。

真紀 いいのよ。二十二歳の時に別れた友達と三人で会うの。

太郎 なーんだ、二人で会うんじゃないんだ。

真紀 サッチャーさん、あなた知ってる？ 伊勢正三の「二十二歳の別れ」

サチ 知ってますよ。ジーンとくる歌だもの。

誕生日に二十二本のろうそくを一緒に消す、って歌でしょ。

真紀 消すんじゃないくて、一緒に火を点けるの。

まあいいわ。化粧も思いきり若くしてね。

太郎 がってん、がってん、承知の助ちゃん。

真紀 太郎ちゃん、私まだ大丈夫？

太郎 大丈夫って……

真紀 疲れた顔してない？

太郎 大丈夫よ。自信を持って。二十代は……ちよつと無理かもしれないけれど、四十

二、三歳の処女に見えるわよ、きつと。

真紀 四十二、三歳の処女？ なんか、魔女みたいね。

サチ 一時流行った美魔女より、よっぽどきれいですよ。

太郎 はい、お疲れ様。これから待ち合わせ場所に直接行かれるんですか。

真紀 まだ十時前ね。今日会う人たちと過ごした下北沢に寄って行くわ。ありがとう。

太郎 有難うございました。真紀さん、久しぶりに会う彼氏よろしくね。

美容室を出る真紀。舞台溶暗、真紀だけにスポット。

真紀 久しぶりに会う彼氏か……

(間) テツちゃん、あなたは知らないでしょうね、あれから私がどんな思いをしなから生きてきたか。

あの時、私はあなたから卒業しようと思った。

だけど今でも卒業できずにいる。

ねえ、テツちゃん、信じられる？ 何年になると思う？ 四十年以上よ。

あなたは、私のことなんか忘れて生きてきたんでしょね。

第四場

白昼の大学キャンパス、記念館前。学生のざわめき、チャイムの音。ベンチに座り辺りを見回している哲朗。真紀登場する。

真紀 お久しぶり。

哲朗 (無言のまま、驚いて立ち上がる)

真紀 (黙って頷く)

哲朗 久しぶり。元気だったかい？

真紀 おかげ様で。あなたは？

哲朗 まあ何とか。

真紀 それにしてもテツちゃん変わらないわね。

哲朗 そうかな。

真紀 遠くか見たら、四十代の人かと思った。なんでそんなに若いの？

哲朗 何の苦勞もしてないって言うんだろ。

真紀 本当ね、何の苦勞もなくのほほんと……うそよ。

哲朗 真紀も変わらないよ。四十年以上経っているのに。

真紀 四十四年よ。ねえ、私、二十二歳に見える？(と、体を一回転させる)

哲朗 二十二？ ちよつと無理があるんじゃないか。

真紀 おかしいなあ、太郎ちゃんに、二十二歳くらいにしてって頼んだんだけどな。

哲朗 太郎ちゃん？

真紀 行きつけの美容室のチーフよ。

哲朗 なんだ。

真紀 (しばらくの沈黙の後) ラム君、来るかな。

哲朗 うーん、難しいな。

真紀 難しいか。

哲朗 無理じゃないかな。

真紀 どうして？

哲朗 どこで、どんな生活をしているのかわからないけど、四十年以上前の約束を頼りに日本にやってくるとは思えない。

真紀 無理かもね。

哲朗 生きてるかどうかだつてわからないし。

真紀 何てことというの。

哲朗 でもね、ここに来る前に、少し時間があつたからシモキタに寄つて来たの。

真紀 そしたら、まだあつたのよ、あの居酒屋さん「ふるさと」。

哲朗 三人でよく行った、あの居酒屋？

真紀 そう。あなたのメールを見て思い出した。それで行つてみたの。

哲朗 あ、ああ。

真紀 あの夜、「ふるさと」で何があったの？

哲朗 ……さあ、覚えてないな……あの映画に出ていた女優、誰だっけ。

真紀 ジョアンナ・シムカス。

哲朗 ジョアンナ・シムカスカ。

真紀 ごまかさないで。

哲朗 え？

真紀 たった一度だけよ。ラム君があんなに怒った顔見せたの。

哲朗 (間) ラムに意見された。

真紀 どんな事？

哲朗 どんなことって、……覚えてないな。ずいぶん昔の話だもんな。

真紀 (しばらくの沈黙の後) 結婚したんでしょ？

哲朗 結婚した。

真紀 学生の頃つき合っていた仏文科の人？

哲朗 えっ、ああ、知ってたんだよね。

真紀 彼女とはなんでもなかったんだよ。真紀が居なくなった後、ほとんど会っていない。

真紀 そう、そうだったんだ。あんなに足繁く〈研究室〉に通っていたのに。変なこと、よく憶えてるな。

哲朗 好奇心旺盛だったからね。それに、気になっていたし。

真紀 お子さんは？

哲朗 息子が一人。結婚して別に住んでる。真紀のところは？

真紀 娘が……一人……じゃ、今は、奥さんと二人で仲良く暮らしているんだ。

哲朗 女房は死んだ。

真紀 あっ、ごめんなさい。

哲朗 いや、いいんだ。随分前の話だから。

真紀 ご病気だったの？

哲朗 肺がん、発見された時には、もうリンパに転移していた。

真紀 お気の毒に。いつ頃なの、亡くなられたの。

哲朗 先月、十三回忌を済ませたところなんだ。

真紀 そうなんだ。じゃ、それから、ずっとひとり？

哲朗 のんびりやってるよ。あれから真紀はどうしてたんだ？

真紀 私？ いろいろあった。

哲朗 旦那さんは何やってる人？

真紀 いないの。

哲朗 亡くなった？

真紀 ううん。

哲朗 それじゃ……

真紀 結婚はしなかった。

哲朗 えっ？ さっき……じゃ、ずっと一人だったんだ。

真紀 そうね……娘がいるけどね。

哲朗 シングルマザー？

真紀 そんなところよ。

でも、シングルマザーなんて言葉はまだなかったし、ふしだらな女って見られるか、棄てられた女って見られるか、どっちかだった。

哲朗 そうか、大変だったんだらうな。

真紀 まあね。

哲朗 真紀が就職したのは、たしか静岡の私立高校だったよね。

真紀 ええ。

哲朗 どうだった？ 英語の先生。

真紀 高校の先生は辞めたの。

哲朗 どうして。

真紀 いろいろあってね。

哲朗 ー、いろいろあって、か。(真紀に視線)

真紀 どうして、どうして、って詮索するのはやめてよ。理由を知って、いったいどうしようっていうのよ。

思い出したくないことだってあるの、私にも。

哲朗 そうか、すまなかった。

真紀 いいえ、私の方こそ。

(間) 十二時過ぎたわね。

私ちよっとその辺見てくる。もしかしたら、ラム君迷っているかもしれないし。(ベンチを離れる。舞台溶暗)

第五場

真紀の回想

真紀 どうして、って聞かれて、本当のことが言える訳ないじゃない。

私は、あなたを卒業しようと心に決めた。

だから、あの夜、初めて正面から向き合った。

一生の思い出になると感じた。これであなたのことを忘れられると思った。

だから、アメリカに着いても、一通の手紙も出さなかった。(間)

留学先の日々は刺激的だった。そんな中、体調に異変を感じた。帰国して、すぐに婦人科を受診した。妊娠を告げられた。あなたとの赤ちゃんがお腹の中で育っているのがうれしかった。翌朝の新幹線であなかに会いに下北沢に行くつもりだった。だけど、その夜夢を見た。悪夢だった。

夢の中の女が舞台後方に現れる。

女

哲朗は今、出かけています。

今夜は研究室にお泊まりです。明日も研究室にお泊まりです。どちら様でしょうか。物理学科の方ですか。

同じ会社に入られる方？ それとも高校時代のお友だちでしょうか。

あ、妹さんですか？ 哲朗は妹がいるといっていました。

そうじゃない？ じゃ、誰なんですか？ 誰なんですか？

あなた、もしかして……あなた、哲朗を卒業するって言ったんでしょ。

あなたの方から離れて行ったのよね。

何しに来たんですか？ 今頃、何しに来たんですか？

あなたは何しに戻ってきたんですか？

あなた逃げたんでしょう？

都合のいい時にだけ戻って来るんじゃないわよ！

ははははは……

やめて！

真紀

女、消える。

真紀

あの夜、金縛りに遭ったように体が動かなかった。何も答えられなかった。逃げ出そうとしても、足が動かなかった。

見たことのない女はなおも質問を繰り返していた。

跳ね起きて、夢だと気づいたけれど、翌朝、あなたの部屋に行けば、同じことが起こるような気がした。

あの最後の夜から、三カ月間も音信不通にしたままに時は経過している。

きつと、状況は変わっている。惨めになりたくなかった。(間)

就職先の高校は静岡では名門と云われる女子高だった。

初出勤の日、私は理事長先生にすべてを打ち明けた。

女性の理事長なら分かってもらえるんじゃないかと、淡い希望を持って……甘かった。

舞台後方に女子高の理事長が現れる。

理事長

なんですって。結婚していないのに身籠っている？
しかも具体的な結婚の予定もないですって？ ふしだらな！
新卒、未婚の女教師が、日に日にお腹が大きくなるのを見せながら教壇に立とう
つていうんですか。

冗談じゃないわよ。この学校を何だと思ってるの。

本校の生徒たちは良家のお嬢さんばかりなんです。

そんなお嬢さんたちに実践的な性教育でもするつもりなんですか。

いやらしい。ああ、いやらしい。

大学で勉強もしないで快樂を求めていやらしいことばかりしていたんでしょう。

真紀

そ、そんな。

理事長

お黙りなさい。挙句の果てに相手の男に逃げられたんでしょう……情けない。

何？ その目は、挑戦的なその目は何？

真紀

挑戦的だなんて……

理事長

あなたのような墮落した人に教師になる資格はありません。

けがらわしい。出ていきなさい。今、すぐ、出ていきなさい。

採用は取り消しです。直ちに出ていきなさい。

二度と私の前に、いえ、この学校に入ってくるんじゃないんです。

出ていきなさい！

真紀

理事長先生！

理事長、消える。

真紀

(歩きながら) 私のプライドはズタズタにされた。惨めだった。

そして、夢だった教員としての生活は、たった一日で終わった。

同居する父や母ともギクシヤクとした関係になっていた。

「お前はテテナシゴを産むつもりなのか。考え直せ。」そう父親に言われた。

自分の居場所は、もうここにはないと思った。

第六場

白昼の大学キャンパス。

哲朗

どうした？

真紀 どうしたって？
顔色悪いよ。何かあったのか？
哲朗 大丈夫。捜したけど、ラム君、どこにもいなかったわ。
真紀 そうか。（腕時計を見て）十二時半か。一時過ぎまで待ってみるか。
哲朗 そうね、待ち合わせ時刻、十二時だったか、一時だったか覚えていないものね。
真紀 昼っていうだけで、はっきりとした時刻は決めていなかったんじゃないかな。そんな気がする。

二人ベンチに座り、話題を探す。遠くから学生たちの雑談が聞こえてくる。例えば、

男A 山中教授の民俗学、眠かったよな。
男B 何言ってるんだよ。お前完全に落ちてたじゃないか。
女 奈々、お前、一番前に座ってたよな。
男B 山中先生って素敵じゃない？
男A えー？ お前、ああいうの好みなの？
女 ファザコンじゃね。
男A やめてよ。あなたたちと違って大人なの。大人。

真紀 見て、あっちのベンチ。
哲朗 どこ？
真紀 ほら、銀杏の木の右側。
哲朗 お爺さんとお婆さんの二人連れか？ この大学の卒業生かな。
真紀 夫婦じゃないわね。
哲朗 どうしてわかる。
真紀 二人ともお互いを気遣っているもの。
真紀 距離感を保って、とつてもいい関係。
真紀 確かにねえ、夫婦じゃないな。二人とも八十超えてるのかな。
真紀 素敵ね。
哲朗 ステキ、か。
真紀 ねえ、今の学生たちから見ると、私たちがあんな風に見えるのかしら？
哲朗 どうかな。
真紀 どうでしょうね。
哲朗 そういえばね、真紀が居なくなっただけからすぐにね、シモキタの楓荘で事件があったんだよ。

真紀 事件？

哲朗 そう。二階の一番手前の部屋にいた男、覚えているかい？

真紀 不愛想で、廊下で会っても目を合わせなかった人でしょう。

私たちより少し年上の人。

哲朗 あの男、部屋で時限爆弾組み立てていたんだ。

真紀 えー、本当？

哲朗 警察の自宅捜索があつてね。部屋から作りかけの時限装置が幾つも出てきた。捕まったの？

真紀 その時は逃げたようだけど、すぐに捕まったみたいだ。

真紀 あの人がねえ。

哲朗 あの年にあつた企業爆破事件にも関係していたらしい。

真紀 そうなんだ。そういう人だったんだ。

哲朗 まさか、あの部屋でそんなことをしているとは思わなかったよな。

真紀 そうよね。

哲朗 まあそんな訳で、二階の住民は僕一人になったんだよ。

真紀 寂しかったんでしょ。

哲朗 寂しかった。

真紀 随分素直じゃない。

哲朗 それで毎日、郵便受けに真紀からの手紙を探しに行った。

真紀 一通も来なかった。

真紀 出さなかったもの。

哲朗 なぜ？

真紀 あの頃、テツちゃんのこと忘れることに精いっぱいだった。

哲朗 そうなんだ……真紀が引越した日にね、駅前の本屋で花言葉を調べた。最期の夜にマキが言っていた山茶花のね。

真紀 なんて書いてあつた。

哲朗 恥ずかしくなるから言うのはやめとくよ。

真紀 もったいぶらないで教えてよ。

哲朗 ひ、ひ……ひたむきな愛。

真紀 (顔を見合わせ) 確かに恥ずかしくなるわね。

真紀 だろう……だけど、衝撃だった。

哲朗 (しばらく黙ったまま哲朗の顔を見て) 若かったわね、お互い。(間)

哲朗 三月初めには引き払った。

真紀 じゃ、私が帰国した三月末には、もうシモキタには居なかったんだ。

哲朗 入社前からドイツで研修だった。

真紀 外国に行ってたのね。
哲朗 訪ねてきたのか？
真紀 ううん、行こうかなって思っただけ。
哲朗 そうか、実はね、ドイツから帰って、真紀の勤めていた学校に電話してみた。
真紀 えっ？
哲朗 理事長室に電話を回されてね「わが校にはそのような教師はおりません、私共とは全く関係ございません。ガチャン」て、取りつく島もなかった。
真紀 私、すぐにやめちゃったから。……捜してくれていたんだ。
哲朗 君の実家の電話番号も探し出して電話したんだ。
真紀 なんて言ってた？ 両親とは最悪だった頃よ。
哲朗 君の居所は教えてくれなかった。
真紀 二度と電話をかけないでくれって言われた。
真紀 きつと、結婚が決まったんだ、って思った。
哲朗 そんな……あの頃……何てこと。
真紀 そうじゃなかったんだ。
哲朗 いろいろあったの。あの頃。
真紀 学校辞めて、家を出て、仕事は何していたんだ？
真紀 翻訳の仕事。先輩の紹介でね。
哲朗 一人で子供を育てながらできる仕事なんて、限られていたのよ。
真紀 そんな時代から娘さんが……
哲朗 そ、そうじゃないの。ずっと、ずっと後のことよ。
真紀 (真紀の顔をしばらく見つめ) そうか。で、その娘さん、今どこに住んでいるの？
真紀 サンフランシスコの郊外。
哲朗 ご主人あつちに赴任しているんだ。
真紀 そうじゃないの、向こうの大学院に留学していて、その研究者と結婚したのよ。
哲朗 へー、優秀なんだ、娘さん。専攻は何なの。
真紀 物理学。そういえば、あなたと一緒ね。
哲朗 偶然だな。今も研究続けているの？
真紀 ブラックホールの何とかって言っていたけど、さっぱりわからない。
哲朗 そうか、最先端の研究しているんだ。
真紀 娘さん、幾つ？
真紀 (焦って) 幾つだったかしら。もう、若くはないわ。
真紀 年齢なんて……、どうでもいいじゃない。
真紀 それよりね、ハイスクールの娘がいるのよ。

あなたの大好きなポニーテールよ。ハハハ（と、不自然に笑う）。
かわいい子なんだから。
ほう。

真紀 どうでもいいことね。（落ち着かない様子で）コーヒー買ってくるわ。
突然、どうしたんだ。

真紀 飲みたくなつたのよ。テツちゃん、ブラックでいいわよね。

哲朗 あ、ああ、ありがとう。

真紀、歩き出すが五、六歩で立ち止まり大きく深呼吸する。

上空を飛びリコプターの音が近づいてくる。

哲朗 （上を見上げ）真紀の娘が物理学専攻か……まさか（舞台溶暗）

第七場

哲朗の回想。ヘリコプターの音大きくなる。

哲朗 もう三十年近く前になるだろうか、ゴールデン街のスナックで見城というフリー・ジャーナリストと出会った。

彼はベトナム戦争当時からサイゴンで取材活動を続けていた。

見城が現れる。

見城 サイゴン陥落じゃなくて、サイゴン解放なんだよ。

陥落なんて言葉を使っているのはアメリカと日本くらいのものさ。

哲朗 見城さん、人民裁判について教えてください。

見城 そりゃ、あなた、悲惨としか言いようがないね。

軍や政府の役人で、ある程度の役職にあった人たちは即処刑だったようだね。だから、上層部の人間はアメリカ軍と一緒に逃げたんだよ。

残った奴はかわいいそうなものさ。

戦時中に案内してくれた知り合いのガイドも、財産は没収されて、本人は再教育キャンプに収容されたまま、いまだに帰ってこない。

生きているのか、死んでしまったのかさえ分らない。

哲朗 具体的なケースについて教えてください。

サイゴン解放の時点で日本にいた留学生の場合はどうなったんでしょう。

見城 日本に留学していたのは殆どが官僚や財界人の息子や娘たちだ。

典型的な自由主義者のブルジョアだ。

人民解放軍が最も忌み嫌う人種だなあ。

帰国した連中は再教育キャンプに即、送られたと思うよ。

親の地位によって、数か月から十数年ってとこかな。

今でもキャンプから帰って来ていない人たちが、数千人にのぼるって話だ。

その内どのくらいの人が生きているのか……

そんなひどい状況だったんだ。

平和ボケの日本に居たら分らんだろうな。

国の体制が代わるってのは、そういうことなんだよ。

アメリカを信じてついていた「南ベトナム」っていう体制が、完全に梯子を外されたんだからなあ。

あの時の「パリ和平協定」なんて、アメリカがベトナムから撤退するための口実みたいなものさ。

残された方は悲惨なものよ。

資本主義と共産主義の最前線に立たされていた訳だからな。

（声はだんだん小さくなり、やがて消える）ホー・チ・ミン亡き後の共産党が権力を握ってしばらくすると、袖の下の世界さ。

イデオロギーに関係なく、権力を握った奴らは汚職体質に変わっていく。中国もそうさ。インドだってひどいもんさ……

見城、消える。

哲朗

おそらく、あの時、カナダ行きを選択していなければ、ラムには牢獄での日々が待っていたのだろう。

カナダを選択して旅立った彼の判断は正しかった。

真紀のポストンへの旅立ちはどうだったんだろう。

留学先から帰国して、就職した学校を、すぐに退職している。

いったい彼女に何があったんだ。

真紀は結婚しなかった……でも、娘がいる。

もしかして……

第八場

白昼の大学キャンパス。両手に缶コーヒーを持って真紀が戻ってくる。

真紀 コーヒーコーナー混んでたから缶コーヒーにしちゃった。
哲朗 あ、ありがとう。(缶コーヒーを受け取る)
真紀 ラム君、やっぱり来ないのかなあ。
哲朗 仕方ないさ。
真紀 どこに住んでいるんだろう。
哲朗 カナダか、アメリカか、いずれにしても、どこか遠い外国に住んでいるはずだ。
真紀 でも、あの時の約束、忘れてはいないはずよ。
哲朗 四十年以上前の口約束を頼りに、外国からこの場所に来るなんて、奇跡に近いと思うよ。
真紀 確かにね。冷静に考えれば、ありえないことかもしれない。
哲朗 (間) 一つ聞いてもいいかい。
真紀 何? あらたまつて。
哲朗 一九七六年。
真紀 それがどうしたの?
哲朗 君の娘さん、七六年生まれなんじゃないか?
真紀 ……
哲朗 話してくれ。頼む。
真紀 忘れたわ。最近、いろいろなことを忘れるの。忘れた。
哲朗 真紀。
真紀 やめてよ!
哲朗 やっぱりそうだったんだ。
真紀 (沈黙の後、急に大声で笑い) そうか、テツちゃん、そんなこと心配してたの?
真紀 バツカみたい。
哲朗 七十八年生まれよ。明日香は。
真紀 明日香って言うんだ。
哲朗 やめて!

遠くからサチの叫び声が近づいて来る。彼女の姿は見えない。

サチ 清水さーん、清水さんいらっしやいませんかー。清水さん、清水さーん。
真紀 清水さん、つて、もしかしてテツちゃんのことじゃない?
哲朗 まさか。
サチ 清水さーん
哲朗 清水さーん
清水さーん
清水さーん

サチ 下北沢、楓荘の清水哲朗さん。

哲朗と真紀、立ち上がって声の方を向く。

哲朗 ここです。楓荘の清水はここにいます。

哲朗、声の発せられた方向に走る。立ったまま注視する真紀。

サチ登場。

サチ あーよかった。お会いできないかと思っていました。

哲朗 あなたは？

サチ IGH日本支社の錦小路と申します。シカゴのラム様から下北沢楓荘の清水哲朗様、高橋真紀様にお荷物のお届けです。

えっ？ 高橋真紀様？ 高橋真紀って、あの真紀さん？

哲朗 そっちに高橋真紀も来ています。

哲朗がサチを連れて舞台中央へ。

真紀 サッチャン！ なぜ、あなたがここに？

サチ まさか、これが真紀さん宛なんて……

真紀 もしかして、朝話していた今日の仕事って……ラム君からの手紙？

見せて。

サチ ちよつと待ってください、受け取りのサインを。

真紀 そんなの後でいいじゃない。(封筒をサチから奪い取ろうとする)

サチ (封筒を奪い取られまいと逃げ、荒い息づかいで) ダメです。必ず受け取りサインを貰ってから荷物を渡すのがIGHのルールなんです。たとえ真紀さんでもル

ールは曲げられません。

真紀 わかったわよ。見かけによらず、サッチャン意外と堅物なのね。

真紀、書類にサインし、厚い封筒を受け取る。中から手紙を取り出す。

サチ 昔、振られた人って、この人だったんだ。(と、つぶやきながら去る)

はるか上空をジェット旅客機が通過する。

第九場

走馬灯の世界。舞台溶暗。真紀と哲朗の姿だけが浮かび上がる。

真紀、声を上げて手紙を読む。

真紀

日本語だわ。

「真紀さん、哲朗さん、私はラム・テイ・フーンの妻、ラム・ホアン・アンと申します。シカゴに住んでいます。」

ラム君じゃない、奥さんから……ラムって、ファミリー・ネームだったんだ。

「私は日本語ができませんので、知り合いの日本人の方に翻訳してもらい、この手紙をインターナショナル・ジェネラル・ハンディーマンに託します。

私の夫は、お二人との再会の約束を、それはもう、楽しみにしていました。

約束の日、四月三十日には、夫婦で孫娘たちを連れて日本を訪れ、大学のメモリアルホールの前に行くのを心待ちにしていました。

ところが、突然、それが叶わなくなりました。

私はお二人に、とても悲しいお知らせをしなくてはなりません。」

だめ、だめ、無理よ。読めない。テツちゃん、読んで。(と、手紙を哲朗に渡す)

哲朗

「私はお二人に、とても悲しいお知らせをしなくてはなりません。彼は帰らぬ人となってしまいました。半年前のことです。

シカゴ市内で開かれた、銃規制の集会に参加していた私たちは、その帰り道、銃規制反対の老人に呼び止められました。

『お前はどこからの移民だ?』と聞かれ、彼が『ベトナム』と答えた瞬間、いきなり、その老人が夫に向けて発砲したのです。

銃声が響き渡る。真紀、悲鳴と共に崩れ落ちる。

哲朗

一瞬の出来事でした。

病院に向かう救急車の中で、彼は息を引き取りました。

彼の最期の言葉が、『約束の日に』……でした。」

真紀

(よろけて、ベンチに置いたコーヒートの缶を落とす) やめて! 嘘でしょ、嘘よ。冗談よねえ、テツ。嘘よ……(ベンチに腰を落とし、茫然と宙を見ながら時折叫び声をあげる)

哲朗

「老人はベトナムからの帰還兵でした。帰国後何十年もの間、PTSDによる恐怖の妄想に襲われ続け、精神病院への入院を繰り返していたそうです。

裁判では、『突然ベトナムと遭遇し、殺られる前に殺った』と叫んでいました。

判決はあろうことか、無罪でした。私は、判決を聞いて、彼を撃ち殺そうと思いました。

真紀

やめてよ……やめてよテツ……そんなことあるわけないわよ……そんな理不尽なこと、嘘よ、嘘でしょ……

哲朗

しっかりしろ、まだ終わりじゃない。

「幸いなことに、その老人は結審した直後、精神病院に強制入院となりました。私は間違いを犯さずに済みました。」

彼の突然の死から半年が経ち、私も平常心を取り戻しました。

最近では、その老人も戦争の被害者だったのだと思えるようになりました。

そして、あなたたちに彼のことを伝えなければいけないと思いい立ちました。」

馬鹿な。ベトナム戦争がまだ続いていたなんて……

真紀

貸して。(と、立ち上がり、手紙を奪い取る)

「私は必死に考えました。こんな時、夫ならどうするだろうと。そして、あなたたちとコミュニケーションをとる方法を思いつきました。それがこの手紙です。ラム・テイ・フーンは私の誇りです。私たち家族の誇りです。」

私たちはトロントの街で知り合い、結婚しました。

私も彼と同じサイゴンの出身で、祖国が消滅した時、シカゴのイリノイ大学に留学していました。

そのため、私のアメリカ国籍は早期に取得できました。結婚後、彼も国籍を得ることができました。

私たちは、ウエイター、ウエイトレスをしながら生活を始め、十年後、自分たちの店を持つことができました。

私たちの店の名前、聞いたら驚くでしょう。エム・イー・ケイ・アイ、『レストラン・マキ』という……」

マキですって、レストランマキ。ラム君、あなたって人は……(泣き出す)

貸せよ。(と、手紙を奪い取る)

哲朗

『レストラン・マキ』という日本料理の店です。

今では、シカゴ市内に3軒の店を持っています。

息子が三人、皆、家庭を持って幸せに暮らしています。

彼はお二人のことをよく話していました。心から感謝していました。

そして、約束の日に再会することを本当に楽しみにしていました。

彼の写真、そして私たち家族の写真を同封します。

白髪の、少しおデブさんになった彼と会ってあげてください。

真紀さん、彼は一番つらかった日に、あなたの口ずさんでくれた、スカボロー・

フェアの歌に勇気づけられたと言っていました。

再会したら一緒に歌うんだと、張り切っていました。

あの人が好きだった歌。

今となっては、夢の夢、となってしまうました。

機会を見て、お二人では非シカゴにいらしてください。
お会いするのを、心から楽しみにしています。
お幸せに。

二〇一九年四月十五日

あなたたちのラム・ホアン・アン」

真紀
何てこと……

封筒から写真を取り出し、二人は無言のまま見つめる。

真紀
(涙を拭きながら) きれいな人、この人奥さんかしら？

哲朗
二人とも若い。

真紀
ちつとも太ってなんかいないわよねえ、ラム君。

哲朗
そうだよな。

真紀
私、ラムって、ファースト・ネームかと思っていた。

哲朗
僕もだ。ファミリー・ネームだったんだ。

何にも知らなかったのかも知れないな、ラムのこと。

真紀
そうかもしれない、奥さんからの手紙で知るなんて……

哲朗
この白人の女性、息子さんの奥さんかなあ。

真紀
あ、この子、ハーフっぽい。

哲朗
すっかりインターナショナルな家族を持ったんだなあ。

真紀
レストランの写真がある。マキって書いてある。……ここで私たちに会うのを楽

しみにしていたんですって。四十年以上の間……

哲朗
スカボロー・フェアか……確かに歌ったな、あの部屋で。

真紀、『スカボロー・フェア』を口ずさむ。

ラムの亡霊が舞台に向かって歩んでくる。真紀の歌うフレーズを受

けて歌いはじめる。舞台上がっても真紀、哲朗からは見えない。

真紀
ねえ、今、ラム君の声聞こえなかった？

哲朗
まさか。

真紀
そうよね。居るわけないわよね。

でも、歌声が聞こえた。Remember me っつ。

哲朗
気のせいだよ。

真紀
そうよね。

哲朗
そういえば、あの頃ラムが言ってたよな。

真紀
なんのこと？

哲朗

スカボロー・フェアって、十八世紀のイギリスの古い歌詞だけれど、サイモンとガーファンクルはこの歌をベトナム戦争に対する反戦歌に作り替えたんだって。

マキ、テツ、ラムが話しながら舞台上に登場する。

ラム

主旋律じゃなくて、サブの旋律。この歌詞の中にダイレクトなメッセージが込められているじゃないか。(と、歌詞を書いた紙を渡す)

マキ

とうに忘れられた大義の下で彼らは戦う？

ラム

そう

亡霊

丘の斜面に木の葉が無い

銀色の涙が墓標を洗う

兵士は銃を磨き上げる

紅の大軍に砲声が燃え上がる

將軍は兵士に殺せと命じる

とうに忘れられた大義の下で彼らは戦う

ラム

そう、何のための戦争かなんて、アメリカ兵の誰も考えていないんだよ。上官の命令に従って無差別に爆撃をする。

北のスパイだと疑われたら、女性だろうと老人だろうと即座に銃殺される。

テツ

アメリカが負けはじめてから、益々ひどくなってきているよな。

マキ

アメリカ軍も相当の戦死者を出してるんだよ。

生きて帰った人も大変みたい。帰還兵の殆どが精神を病んでいるらしいわ。

ラム

ベトナム人が一つの国としてまとまるための戦争だった筈なのに、全く違う方向に進んでいる。

テツ

なんなんだろう、国って……

マキ

戦争なんて誰も望んでいないはずなのに、誰がこんな風に世の中を動かしているの……

ラム

誰だろう。でも、やめる訳にはなくなっているんだ。

だれも望んでいないのに。

泥沼だよ、泥沼。底なしの泥沼。

亡霊

底なし沼に嵌った奴は、そこから這い出すことはできない。

一旦銃を手にした奴は、二度と手放すことができない。

まるで宗教のように銃だけを信じるようになってしまった。宗教のように。

哲朗

(耳を澄ませ) 今、僕もラムの声が聞こえたような気がする。

真紀

そうでしょう。きっと来ているのよ、この辺りに。

哲朗

来てるって、ラムの……霊が？

真紀

そう。間違いなく近くにいる。

哲朗

話しかけてみようか、答えるかもしれない。

真紀

だめ！話しかけた途端にどこかに行ってしまうわ。

私、はつきりと思い出したの。

停戦ラインを突破して北ベトナム軍がサイゴンを包囲した頃のこと。

あの頃のラム君、ギロギロに痩せてた。

マキ

働きながら大学続けられるんでしょ？

ラム

無理だ。国がなくなる。

マキ

国がなくなる？でも、パスポートあるでしょ。

ラム

紙切れになっちゃうんだ。きつと。

マキ

えっ？

ラム

国がなくなったら、大使館も閉じられる。

僕達は国籍のないインドシナ難民になるんだ。

だけど、日本の外務省は難民申請を認めないと思う。

そうしたら、僕らは不法滞在者になるんだ。

マキ

そんな事って……

真紀

あの夜、お茶漬けを一杯作ってあげることしかできなかった。

亡霊

ああ、あの温かさ。忘れるものか。

哲朗

仕方ないさ。

あの頃の僕らは世の中のこと何も知らなかった。

一杯の暖かいお茶漬け、嬉しかったと思うよ。

あの日のラムにとっては。

真紀

(感情的に) あのラム君が拳銃で撃たれて死んでしまったなんて。

しかも、ベトナム戦争の帰還兵に撃たれたのよ。

ねえ、テツちゃん、そんなことってある？戦争から四十年以上も経っているの

よ。

悔しいよ。テツ、悔しいよ。

俺だって悔しいさ。だけど、現実起きてしまったんだ。

あの老人も大儀なき戦争の被害者だったんだ。

ラム君の為に、カンパをしたよね。

そう、合計七万七千七百七十七円。

よく憶えている。

あれが、あの頃の僕らにできる精一杯だったんだよな。

……〈決心して〉あの最後の夜……ラム君がバンクーバー行きの航空券を手に入

真紀

哲朗

真紀

哲朗

真紀

亡霊

哲朗

哲朗

れて飛び発つ前の日、ラム君が私たち二人に言ったこと憶えてる？
……ああ、憶えているさ。

真紀

だけど、あいつが言うようにはならなかった。

真紀

そうね……

ラム

その時、僕はどこに居るのか分らないけど、生きていたら絶対に日本に戻って来る。

マキ

生きていたらなんて、そんな事言わないで。

テツ

そうだよ。そんな言い方やめろよ。

ラム

出発する前に、二人に言っておきたいことがある。

テツ

改まってなんだよ。

ラム

テツロウ、マキを大切にしろよ。マキ、テツロウを大切にしろよ。

二人は最高のカップリングだと思う。僕が言うんだから間違いない。

マキ、テツ、ラム消える。

亡霊

そうさ、間違いない。

哲朗

「僕が言うんだから間違いない」確かそう言ってたよな。

真紀

偉そうに言ってたよね。

だけど、あれから四十四年も経っちゃった。

哲朗

四十四年か。

亡霊

まだ間に合う。遅すぎるっていうことはないさ。

哲朗

そうかもな。

亡霊

大丈夫だ。二人の気持ち次第さ。まだ間に合う。

哲朗

確かにそうかもな。お前の言うとおりで。確かにな……（呟き続ける）

ラムの亡霊、意志をもって方向転換し、消える。

第十場

白昼のキャンパス。舞台上には真紀と哲朗のみ。

真紀

えっ、何？

哲朗

んっ？ 俺、何か言った？

真紀

「そうかもな、確かにそうかもな。お前の言うとおりで」って、いきなり独り言。

哲朗

そうか……

真紀 どうしたの？
ラムと話していた。
真紀 やっぱり来ていたんだ。
哲朗 そう。あいつ、何としても約束を守りたかったんだ。
真紀 生きていたかったんでしょね。かわいそう。
哲朗 悔しいだろうな。
真紀 だから、約束通りに……ラム君らしいわ。ラムくん！
哲朗 もう行ってしまったよ。（何かを決心し）そうだ……来月、シカゴのラムの家に二人で行ってみようか。
真紀 突然どうしたの？
哲朗 奥さんからの手紙にシカゴの住所が書いてあった。
真紀 （間）いいわ。会ってみたい、奥さんのアンに。きつと素敵な人よ。
哲朗 よし。連休の後だったら航空券も取りやすいだろう。
真紀 （しばらく思索し）ひとつお願いがあるの。
哲朗 何？
真紀 シカゴにはサンフランシスコ経由で行ってほしいの。
哲朗 サンフランシスコって、もしかして……
真紀 そう。あの子が二十歳の時に、一度だけ聞かれたことがある。
哲朗 「お父さん、本当に死んだの？」って。
真紀 どういうこと？
哲朗 明日香には、生まれる前に父親は死んだって言ってあったの。
真紀 二十歳になった時、お墓の場所を聞かれたの。お墓参りしたいと思ったみたい。
哲朗 墓参り……
真紀 さすがに答えられなかった。どこにお墓があるなんて。
哲朗 あの時、私、娘の前でしどろもどろになってしまった。
真紀 もしかして。
哲朗 明日香はそれから一度も聞かない。父親のこと。
真紀 あの頃、明日香がもう一度父親のことを聞いてきたら、今度は本当のことを話そうと思っていた。
哲朗 それって……
真紀 あの頃、テツちゃんを卒業しようと思って、ボストンに行ったんだけど、あの時私の中に……
哲朗 やっぱり、やっぱりそうだったんだ。
真紀 明日香が生まれて、今まで四十年以上、明日香の中にいつもあなたが生きていた。

どこにいるのかわからないあなたが。

哲朗 ああ……あの頃……（真紀の高校に電話した）あの頃、もっと探し続けていれば……

どこからか、サイモンとガーファンクルの『スカボロー・フェア』が
低く流れてくる。

真紀 だから、会うことはできなかったけど、いつもあなたは私の隣にいたの。
今までずっと。

哲朗 真紀。

真紀 明日香にも本当のことを話す。だから、だから、明日香に会って。
いいのか？

哲朗 会って。

哲朗 本当に？ だけど、なんて言えばいいんだ。今更（父親だなんて）

真紀 何も言わないで。

哲朗 何も言わない？ 三人で会うだけで？

真紀 あの子ならそれだけでわかる。あなたの目を見たら、きっとわかる。この人が探
し続けていた大切な人なんだって。

哲朗 真紀。

真紀 だから会って。明日香に。

哲朗 （黙って頷き、立ち上がる）抜け落ちている時間を取り戻せるだろうか。

真紀 無理よ。私たち別々の時を生きてきたんだもの。

哲朗 そう、何十年も別々に生きてきた……何十年も。

真紀 過ぎ去った時は変えられない。

哲朗 だけど、だけど今、君と二人、此処で再び出会った。

過去を変えようなんて思わない。だけど……

真紀 だけど、何？

哲朗 今を出発点にできないだろうか？

真紀 出発点……

哲朗 そう。

真紀 （間、確信して）新しい時間ならきっと創り出せる。きっと。

最終章の始まり。

最終章？ 最終章。

真紀 そう。私たちの最終章が始まる。

音楽急激に高まる。二人、未来を見つめる。

—幕—

(四〇〇字詰原稿用紙換算 約一七七枚 上演時間約一二〇分)

作者連絡先メールアドレス machikosan@jcom.home.ne.jp